



学校だより

末子配付

第11号ジャカルタ日本人学校
令和5年(2023年)2月28日
校長 緒方 克行
TEL: 021-745-4130

学校生活を創造してきた子どもたち

学年末を迎えるにあたり、卒業生を送る会などの取組が展開され、いよいよ年度の節目を迎える重みを感じています。

今年度最初の学校だよりでは、年間テーマを「つくる<学校を創造する With Corona>」とする事を子どもたちと保護者の皆様にお伝えしました。そして、「誰もが『コロナだからできない』ではなく『コロナだけできる』『コロナだからできる』と発想を転換し、一方で『できない理由を考える』のではなく、『できる方法を考える』という前向きで能動的な思考をしながら、これまで積み上げてきた成果を十分に加味しつつ、魅力ある学校を創造していきたいと考えます。」とお伝えしました。

そこでもう一度 With Corona であった今年度を「できる」「つくる」という観点で振り返ってみましょう。

☆ 体育祭の開催

5月下旬にタンゲラン市よりようやく体育の授業を再開することの許可が出ました。それから約1ヶ月半後に半日ではありましたが、体育祭を開催することができました。2年半、体育の授業ができず、外出することもままならない状況が明けて開催された体育祭でした。体育の授業が始まった最初の頃は、校庭でしばらく体を動かすと、気分を悪くする子どもが続出しました。でも、子どもたちは演技や競技に取り組み、当日が近くなるとダンスの練習をもっとやりたいという声をあげていました。自分の体と相談しながら「コロナだけできる」体育祭を「つくる」ことができたのです。

☆ JJS フェスティバル開催

3年ぶりにフェスティバルを開催することができました。けれども、室内で密になる事を避けるために、子ども同士で見合う日と、保護者の皆様に見ていただく日を分けて行いました。ここでも子どもたちは、学習の成果を見せました。2日間同じ発表をすることは、モチベーションを維持する難しさがありますが、胸を張って自分たちの思いを伝えていました。中学3年生は、この大きな行事をけん引する立場ですが、前回からのブランクを乗り越え、「できる方法を考え」生徒同士で話し合いを進めて、コロナで中断されていた JJS フェスティバルを「つくる」を実現させたのです。

☆ 卒業式

小学6年生は、どのような卒業式にしたいか、10月から考えてきました。まだコロナの制限状況を見通すことが難しい中、自分たちが伝えたいことを表現できる卒業式を目指し、学年で話し合いを重ねてきました。学年で掲示板を作り、子どもたちはそこに掲示されたスケジュール表やお知らせを見ながら、自分たちの手で準備を進めています。

中学3年生はコロナ禍の下で、11月には立志式において自分の生き方を後輩たちの前で宣言し、受験を乗り切り、式の練習は帰国等で全員がそろわない中で行うという、数々の高いハードルを乗り越えながら、これまでの集大成としての卒業式の準備を進めています。生徒一人一人の状況が異なる中で、常に自分は何ができるのかを考え行動しながら式当日を迎えるわけです。

小学部、中学部の卒業生たちは、「コロナだけできる」自分たちの卒業式を「つくる」姿を今、体現しています。

このように、子どもたちは厳しい状況の中でも解決策を出し合い、努力しながら難局を乗り越えることができる「コロナだから(育成することが)できる」力を、この1年の活動を通して身に付けることができたと言えるでしょう。